季節保育所の保育効果に関する一考察

上原万里子　柴田礼子　森　重敏

序

昭和29年度以来本学学生の農村生活実習として，毎年６月中旬以後の２週間，群馬県利根郡昭和村（昭和34年の隣接村合併までは久呂保村）において，学部児童科３，４年，栄養科４年，被服科４年，および短大児童科２年の学生による農繁季節保育所を開設し，奉仕的な保育活動を行い，有意義な成果を積み重ねて本年（第８回実習）に及んでいる。

元来，昭和村の前身である久呂保村は戸数950戸(昭29年)，人口約9600人をもつ山村で，約85%は農業を営んでいる。水田が少ないため養蚕，こんにやく栽培，雑穀栽培が盛んで，ことに６月中旬―７月上旬は養蚕，麦刈，田植が気候的関係で重なるために最大繁忙期に達する。

小学校は村の中心森下部落に690人の児童を擁する本校があり，永井部落に90人，赤城部落に88人の児童（４年生以下）を収容する分校がある(昭36年)。児童の保護者は父母ともおおむね小学校卒であるが生業に勤勉，子女の教育に熱心である。家族数は平均７人である。

こうした環境の久呂保村で，川額部落の八幡神社に季節保育所を初めて開設したのが29年６月，30年度は森下部落の大森神社，31年度は同部落の南小学校，32年度同小学校と入原部落の雲昌寺，33年度同上，34年度同小学校と永井分校，35年度同本校・永井分校・貝野瀬部落公民館，36年度同上と増設され，それに従つて被保育児数も最初の35人から本年度の172人に増加した。また雲昌寺保育所は子育保育園として33年度より常設されるまでに発展した。

この間われわれは，農村幼児保育の重要性と保育効果向上の実際的必要性とにより，30年度に父母を対象としてしつけおよび幼児の生活に関する実態調査，31年度には保育効果に関する調査を実施し，その後の保育改善のための基礎資料を得ることができた。その結果をもとにして本年６月再び保育効果に関する調査を試み，更にその後約１ヵ月を経て同様な調査ならびにそれに関連する小学児童の調査を試みた。以下に述べる小論はこの調査結果の概要である。

こうした研究結果が，将来の本学の保育実習のみならず，保育一般の理解と実際面へ少しでも寄与するところがあれば幸と思う。

I　研究の目的

日常生活における幼児の行動の変容が，本来の成熟や学習による一般的な成長発達の結果として現われることは当然であるが，そうした発達過程の一時期で経験する有意味な生活によつても多少の規定を受けることもまた事実である。そのような意味で，われわれの短い２週間の保育は幼児の行動の変容にどのような影響をおよぼしているかを調べ，また一方，子どもと生活を共にする親の

側には保育が直接，間接にどのように受けとられ，作用しているかを知り，更に幼児期に受けた保育を数年後の現在振り返つてどのように感じているか，学童の印象を通してその影響度を調査し，保育効果に関する検討を試みようとすることが本研究の目的である。

Ⅱ　方　　法

手続きおよび実施方法：質問紙による多肢選択法および簡単な自由記述法を用い，幼児の保護者および小学校4年生の児童に回答を求めた。なお，実施法は，保護者には初回は幼児に質問紙を持ち帰らせ(紙問紙A)，2回目は役場の協力を得て家庭に配布してもらつた(質問紙B)。学童へは，小学校の協力を得てわれわれ自身の手で調査を行つた。

対象：ⓐ　第1(南小学校)，第2(永井分校)，第3(貝野瀬)保育所幼児全員の保護者（但し本報告では第1保育所の回答者のみを扱う)。被調査者の幼児の年齢別，性別分布は第1表の通り。また，第1回被調査者の幼児の保育経験年数は第2表の通り。

第1表　被調査者の幼児の年令別性別分布

調査時／性別／年令	第1回調査，質問紙A（6月）			第2回調査，質問紙B（8月）		
	男	女	計	男	女	計
5才	12人	15人	27人	11人	15人	26人
4	10	11	21	10	14	24
3	2	6	8	1	5	6
2	2	3	5	3	2	5
計	26	35	61	25	36	61

第2表　幼児の保育経験

保育経験	男	女	計
イ．今年はじめて	12人	15人	27人
ロ．昨年と2回目	7	11	18
ハ．1昨年と2回目	3	0	3
ニ．1昨年と昨年と3回目	2	3	5
無記入	2	6	8
計	27	35	61

ⓑ　南小学校本校4年児童，夏期休暇出校日出席者91名（男40，女51)，但し，本報告ではこのうちの保育経験児童56名（男20，女36）のみを扱う。対象児童の保育経験回数は第3表の通り。

第3表　4年児童の保育経験

保育経験	男	女	計
3回	3人	3人	6人
2	7	15	22
1	10	18	28
計	20	36	56

調査時期：保護者への質問紙は，第1回を保育開始10日目の6月下旬，第2回目を保育終了40日目の8月上旬に行つた。小学校児童の調査は8月6日の出校日に行つた。

Ⅲ　結果および考察

A　親の認知した保育の影響

1　保育開始10日目の行動変容

①　質問紙Aの質問「お子さんが保育所に行くようになつて日常生活でいくらか変つたことがありますか」に対して回答を求めた。その結果は第4表の通りである。

第4表　保育所経験がもたらした日常生活の変化

項目	男		女		計	
	実数	%	実数	%	実数	%
イ．大へん変つた	7	26.9	12	34.3	19	31.1
ロ．少し変つた	16	61.5	20	57.1	36	59.0
ハ．わからない	2	7.7	—	—	2	3.3
ニ．ほとんど変らない	—	—	1	2.9	1	1.6
無記入	1	3.8	2	5.7	3	4.9
計	26	99.9	35	100.0	61	99.9

(ロ)の「少し変つた」とい

う回答が最も多く59.0%，次が「大へん変つた」の31.1%，「わからない」「ほとんど変らない」という回答は非常に少ない。また「大へん変つた」というものの割合は，男児26.9%に比べ女児は34.3%，「少し変つた」ものが男児61.5%に対し女児57.1%で，女児の方に幾分保育の影響が多く現われているようにみられる。

② 次に，どのような点で変つたかということについて「以前とくらべてお子さんの日常生活でどのような点が変りましたか」の質問紙Aの質問の結果をまとめると，第5表を得る。表にみるように，1位は男女児とも「いろいろのことを……」の項目でいずれも8割近くを占めている。これは歌やゆうぎなどをおぼえて家庭で復習してみせることを指しているものと思われる。男児では「よくねるように……」も同じく1位，女児では2位，これは朝7時から夕方6時までの保育所生活が，幼児の健康的な睡眠を誘う原因となつていると思われる。「教わつたことを……」は女児2位，男児3位であるが，内容が「いろいろのことを……」と重複しているように思われる。次の4位は「1人でねる……」。これは「よくねるように……」と関係があり，一日の活動の疲れが寝つきをよくし，就寝の際にぐずつたり甘えたりして人手をわずらわせている時間がなくなつたと解釈していいのではないかと思われる。次に「よく遊ぶ……」「着物をひとりで……」が男女とも5位，「用便後の手洗い」「わがままを……」が全体で7位，「食前の手洗い」9位，「ごはんを……」が10位，「周囲の人となじむ……」「食前食後のあいさつ」が11位，「鼻かみ」と「泣かなくなつた」が13位，以上は全体の$\frac{1}{3}$以上の幼児にみられた行動の変化である。ここで注目したいことは，われ

第5表　保育経験による日常生活の変化

項目	男		女		計	
	人数26人中	順位	人数35人中	順位	人数61人中	順位
1. いろいろのことをおぼえた	20	1	27	1	47	1
2. 教わつたことをするようになつた	17	3	24	2	41	2
3. よく遊ぶようになつた	13	5	18	5	31	5
4. 食前食後のあいさつをするようになつた	9	16	15	9	24	11
5. よくねるようになつた	20	1	21	2	41	2
6. 団体で行動することができるようになつた	8	19	7	16	15	18
7. 鼻をかむようになつた	10	14	12	14	22	13
8. 食前に手を洗うようになつた	13	5	14	10	27	9
9. 周囲の人となじむようになつた	11	11	13	12	24	11
10. 用便後手を洗うようになつた	12	9	16	8	28	7
11. ひるねをするようになつた	9	16	6	17	15	18
12. 着物を独りで着たり脱いだりするようになつた	13	5	18	50	31	5
13. はしを正しく持つようになつた	11	11	6	17	17	17
14. ごはんをあまりこぼさないようになつた	12	9	13	12	25	10
15. わがままをあまりいわなくなつた	10	14	18	5	28	7
16. 1人でねるようになつた	14	4	19	4	33	4
17. いいつけを守るようになつた	11	11	8	15	19	15
18. 人に頼らないで自分で，自分のことをするようになつた	13	5	6	17	19	15
19. あまり泣かなくなつた	8	19	14	10	22	13
20. いたずらをしなくなつた	9	16	6	17	15	8

われの季節保育所では保育期間が2週間に限られているので，その保育の目標をごく小さく絞り，非常に多くの幼児のしつけ教養の問題点からとくに基本的習慣といわれる面のしつけに重点をおいてきた。その中でも，食前の手洗い，用便後の手洗い，食前食後のあいさつ，鼻かみなどは，都会に比べて忙しい農村の家庭ではほとんど放任されている現状であるから，われわれはこの点に主眼をおいてきた。その結果がこの調査にはつきりと現われている。なお着脱衣の自立，わがままの減少，人となじむ，泣かなくなつた等の変化は，集団生活による自然の効果とみてよいと思われる。

2　保育の影響度

①　質問紙Aの質問「今度の保育はどの程度役に立つたか」に対し，次の第6表の結果を得た。

第6表　保育が役に立つた程度

項目＼年令および%	5才	%	4才	%	3才	%	2才	%	計	%
イ．非常に役に立つた	17	63.0	16	76.2	5	62.5	5	100.0	43	70.5
ロ．少し役に立つた	8	29.6	3	14.3	1	12.5	—	—	12	19.7
ハ．わからない	—	—	2	9.5	—	—	—	—	2	3.3
ニ．あまり役に立たなかつた	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
無記入	2	7.4	—	—	2	25.0	—	—	4	6.6
計	27	100.0	21	100.0	8	100.0	5	100.0	61	100.1

表にみるように2才児の保育者は100％「非常に役に立つた」といつており，3才62.5，4才76.2，5才63.0，全体を通してみると70.5％になつている。3才では対象数が少ない上に無記入が25％もあることがその割合に影響していると思われるが，一般に年齢が低ければ親の主観的な保育効果の度合いが高いのではないだろうか。

②　次に「お子さんを保育所に出してどのように思われますか」という質問紙Aの質問の結果を年齢別に集計すると第7表の通りである。

第7表　親の感じた保育の影響

項目	5才		4才		3才		2才		計	
	人数 27人中	順位	人数 21人中	順位	人数 8人中	順位	人数 5人中	順位	人数 61人中	順位
1.　安心して仕事ができた	25	1	20	1	7	1	4	2	56	1
2.　子どもの生活態度がよくなつた	13	2	12	2	2	5	2	3	29	3
3.　大学の人達と接する機会を得てためになつた	9	4	9	4	3	4	2	3	23	4
4.　子どもを見なおすようになつた	8	5	8	5	5	2	1	5	22	5
5.　しつけについて考えるようになつた	12	3	11	3	4	3	5	1	32	2
6.　あまり得るところがなかつた	2	6	—	—	—	—	—	—	2	6

全体を概観すると1位「安心して……」，2位「しつけについて……」，3位「子どもの生活態度……」の順になつている。年齢別にみると2才児の親は全員「しつけについて……」といつており，5才児，4才児では半数が「子どもの生活態度……」といつている。従来家庭にあつてはとかく2，3才の小さい幼児には「世話」ということに育児の観点がおかれ，教育的な意味での意図的な「しつけ」はもつと大きくなつてから改めてなされるべきもののように思われがちであるが，保育所保育において2，3才の低年齢幼児にも教育的なしつけが無理なく行われる可能性と必要性を，保育

を通して親が認識したことがこの結果で明らかである。その他，２才児の父親（教員）の，家中の者が子どものしつけについて考えるようになつた，幼児のしつけ，家族生活，食生活の面で村全体の大きな刺激となつて農村の発展に効果がある，という自由記述があるが，このことはわれわれの保育効果の１つのプラスの面であろう。

③　質問紙Aの「どんな点でお困りになつたでしようか」については第８表の結果を得る。

第 8 表　保育所に出すのに困つた点

項　　目	男		女		計	
	人数 26人中	順位	人数 35人中	順位	人数 61人中	順位
1. 途中で帰つてきた	5	3	3	8	8	7
2. 朝落ちついて食事をしなかつた	4	5	7	4	11	5
3. 朝なかなか起きなかつた	5	3	8	3	13	3
4. 着物をあれこれいうようになつた	4	5	7	4	11	5
5. 雨の日や風の日に困つた	4	5	9	2	13	3
6. 朝食をたべずに出かけた	1	11	2	10	3	11
7. 途中が心配だつた	3	9	2	10	5	10
8. 出がけに泣いたりぐずる	2	10	5	7	7	8
9. 少しなまいきになつてきた	7	2	11	1	18	1
10. 保育所が遠かつた	4	5	3	8	7	8
無　記　入	8	1	7	4	15	2

表にみるように無記入が非常に多く，この中には困つた点がなく無記入のものもあると思われるが，困つた点を書いては保育者に悪いという村の人の気持もあるかもしれない。この点は発問の仕方をもう少し考慮すべきであつたと思う。全体として一番多いのは「少しなまいきに……」である。「なまいき」になつたということが幼児の発達の面からみて，親が感じているように困つたこと，好ましくないことであるかどうかはこれだけの資料ではいえないが，これは子どもの行動変容の１つであり保育の影響であろう。次に「朝なかなか……」という項目，これは日常の幼児の起床時間や１日の睡眠時間の状態を更に検討する必要があるが，保育所には幼児の足で30分以上１時間近くもかかる場合が少なくなく，幼児はすでに７時頃には登所している状態であるから，保育所に出すためにかなり早く起されているのではないかと思われる。また１日の保育スケジュールに組まれた午睡は半数以上が眠つていない現状であるから，さきに第５表でみた「よくねるようになつた」ということと考え合せ，幼児の要求する１日の睡眠時間が不足なのではないかと思われる。この点は今後われわれの保育で考慮すべき点ではなかろうか。次に「雨の日や風の日に……」であるが，梅雨期の保育で傘の要る日が多く送り迎えの手のない家では当然であろう。

④　次に対象幼児のきようだいで，これまでに保育を経験したものがあるかという質問紙Aの質問，およびそのきようだいに対して保育所経験がどのように影響を与えているかということについて見てみよう。第９表が示すように被調査者の５割以上がすでに保育幼児の兄姉をわれわれの保育所に通わせた経験をもつており，その子ども達に保育がどのような影響を与えたかについては，イ．非常に影響があつたとするもの12，ロ．少し影響があつたとするもの８，無記入12である。またどのような面で影響をおよぼしているかについての自由記述から主なものを拾つてみると，団体行動の訓練ができているので入学当初心配がなかつた，学校へ行

第９表　保育経験の兄姉をもつ幼児数（61人中）

保育経験のある兄姉の人数	保育経験をもつ兄姉のある幼児数
1人	21人
2	10
3	1
計	32

つてもおくれをとらないというものが一番多く，好き嫌いがなくなつた，家を出る時帰る時の挨拶をきちんとする等がみられる。

3　保育終了40日後の行動変容

①　次に質問紙Bにより保育終了40日後の行動変容を見てみる。「お子さんは保育所でおぼえた歌やゆうぎなどでいまも遊ぶことがありますか」の質問に対し，無記入の3人を除いて58人全員が「ある」と答えている。その内容についてはよくうたつた歌やゆうぎ「もみじ」「子どもの王様」その他があげられ，また近所の子ども達が集つて幼稚園ごつこのような遊びが盛んに行われていることがわかる。

②「お子さんは保育所に行つていたときのことをいまでもおもい出して話すことがありますか」の問に対しては61人中5人が「ない」，4人が無記入，52人が「ある」としている。その内容は先生の話，友達のことが一番多く，指人形で遊んだこと，山の遠足，紙芝居，おゆうぎ会，おやつ，友達の失敗談，先生の口まね，お土産をもらつたことなど楽しい思い出が話されている。

③「お子さんは保育所がはじまる前や保育期間中に比べて近頃変つてきたことがありますか」の問に対して次の第10表のような回答がみられた。

第 10 表　保育40日後の子どもの行動変化

変つた点		5才(26人)	4才(24人)	2・3才(11人)
社会性	誰とでも話せるようになつた。自分の意見をいえるようになつた。1人で遊べるようになつた。友達と遊べるようになつた。我を張らず人の意見をきくようになつた。小さい子のめんどうをみるようになつた。	3	4	2
知識欲	本を読んでもらつたり絵本を見たりすることが好きになつた。質問するようになつた。	3		
清潔の習慣	用便後や食前の手洗いができるようになつた。 毎朝顔を洗うようになつた。 清潔について自覚してきた。	3		
言語	ことばがていねいになつた。 なまいきなことばを使う。	1	2	
遊び	教えてもらつた歌などよくうたう。 1人で遠くまで遊びにいき，近隣の部落の地理に明るくなつた。	2		
生活習慣	朝寝坊がなおつた。きまりがよくなつた。 甘いものをほしがるようになつた。ひるねのふとんを自分で仕末するようになつた。泣き虫がなおつた。	1	2	2
その他発達一般	物事の分別がついてきた。人に負けることがくやしいという気持が強くなつた。 大人になつた。	3		
無記入（変化なし）		14	17	8

表は便宜上7つに分類してみたが，これによつて親の認知した保育後の子どもの行動変容について概観すると，表中の無記入は変化なしとするものが大部分と考えられるので，5才児約54%，4才児約71%，2，3才児約73%が変化なしと答えている。年齢の低いほど保育の影響が少ないか，

第11表　保育所の経験がもたらした日常生活の変化

項　　目	5才	4才	2・3才
イ. 大へん変つた	9	8	2
ロ. 少し変つた	16	10	10
ハ. わからない	—	2	—
ニ. ほとんど変らない	—	1	—
無　記　入	2	—	1
計	27	21	13

または早く消えるということがいえると思う。このことをさきの質問紙Aの質問，保育開始1週間後の行動変容第4表の資料と対照させて考察するため，もう一度年齢別に集計しなおし，その分布をみると次の第11表の通りである。これによつてみると2，3才児といえども保育の影響を明らかに受けていることを親が認知している。このことから年少児ほどその影響は早く消失し，長く残らないということがうかがえる。次に影響の残つているものについてどのような面で幼児の行動が変化しているかをみると，第10表に戻つて社会性に関するものが一番多く現われている。5才児では我を通さず人の意見もきくようになつた，友達と遊べるようになつた，小さい子の面倒をみるようになつた，4才児に誰とでも話せるようになつた，人の意見をすなおに聞き，自分の意見をいえるようになつた，友達や妹と遊べるようになつた，1人で遊べるようになつた，2，3才児に妹のお守をよくするようになつたという回答がある。また知識欲がめだち，清潔の自覚と習慣のついてきたものが5才児にいずれも3件ずつあり，言葉使いの変化，遊びの変化は保育の影響であろう。

第12表　保育所に行つてよくなつた点

項　　目	5才	4才	2・3才
友達と遊べるようになつた	5	4	1
ひとり遊びができるようになつた		1	
わがままが少なくなつた		1	1
内気がなおり，はきはきいえるようになつた		1	
お使いができるようになつた	2		
自分のことは自分でしようとする	2		
言葉がていねいになつた	1	2	1
食前の手洗いができるようになつた	2	1	
用便後の手洗いをするようになつた	2		
食事の挨拶ができるようになつた	1	2	
好き嫌いがなくなつた	1		
泣かなくなつた	1		
すなおになつた		1	
おとなしくなつた		1	
目ざめがよくなつた		1	
食事が静かにできるようになつた		1	
悪いくせがなおつた		1	
悪いことをして叱られるとすなおにあやまる	1		
きまりがよくなつた	1		
いろいろおぼえた	2		
話す言葉が大変多くなつた			1
歌やおどりをして遊ぶ		1	
無　記　入	9	14	7
計	30	32	11

④　更に保育所に行つてよくなつた点，悪くなつた点，よくも悪くもないが変つた点について質問した結果は次の第12，13，14表の通りである。これは前の③でみたことを価値的な面からきいたものであるが，3つの表を通して気がつくことは，幼児の個人的，社会的適応能力が保育によつて開発され，ゲゼル（Gesell, A. L.）のいわゆる文化適応（acculturation）が形成されたものと思われる。例えばわがままを抑えて友達と協調できる，お使いの能力や自立心，手洗いや挨拶の習慣が確立する，一方悪口やなまいきをおぼえ，着物やおやつについて注文を出す，人まねをしてみんなを笑わせる，というような点にみられるのである。

B　保育経験の小学児童へおよぼした影響

1　保育所における快的経験

保育所生活での快的経験としてどのようなことが印象づけられているかをみるため「保育所で一ばんうれ

第13表　保育所に行つて悪くなつた点

項　　目	5才	4才	2・3才
年下の子にいばるようになつた	1		
悪口を知るようになつた	1		
なまいきをいう	1		
泣き虫になつた	1		
着物についてわがままをいうようになつた		1	
時間におやつをほしがつて困る，おくれるとうるさい		1	
無　記　入	22	22	11
計	26	24	11

第14表　よくも悪くもないが変つた点

項　　目	5才	4才	2・3才
みんなとよく遊ぶ	2		
毎晩歌とおどりをする		1	
先生の口まねをする			1
無　記　入	24	23	10
計	26	24	11

しかつたことやおもしろかつたことはなんですか」という質問に対する回答を求めた。その結果を集計したものが第15表である。全体としてみると一斉保育に関することの印象が快的経験のうちで最も多く36.4%，すなわち絵画，製作，歌，ゆうぎ，お話，紙芝居，遠足などが，嬉しい楽しい経験として彼らの心に残つているのである。次にだいたい同じような割合を占めているものに遊びに関する経験の31.2%がある。ブランコ，砂遊び，鬼ごつこなど友達との遊びが楽しい経験として印象づけられていることがわかる。そのほか絵本や玩具で遊んだりこれをお土産にもらつたりしたこと，すなわち文化財に接することの喜びや，給食に関すること，すなわちドーナツをも

第15表　保育所における快的経験

項　　目	男		女		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
お話，ゆうぎ等一斉保育に関すること	6	23.1	22	43.1	28	36.4
ブランコ，鬼ごつこ等遊びに関すること	8	30.8	16	31.4	24	31.2
玩具，絵本等に関すること	8	30.8	3	5.9	11	14.3
給食に関すること	2	7.7	6	11.8	8	10.4
愛情を示される行為	1	3.8	2	3.9	3	3.9
そ　の　他	1	3.8	2	3.9	3	3.9

らつて嬉しかつた，ミルクがおいしかつたなども快的経験としてあげられている。次にこの快的経験の性別による相違をみると，女児では一斉保育に関する経験が快的な印象として43.1%の最高位を占めているが男児ではさほどではない。これに反し絵本や玩具に関しては男児が30.8%の率で快的経験を訴えているのに対し女児ではわずかに5.9%にすぎない。みんなで折紙を折つたり，絵をかいたり，歌をうたつたりするというある一定の型の中での保育は，男児には楽しい印象としてはあまり残らず，それよりも珍らしい玩具や絵本で自由に存分に遊んだことの方が快的印象を与えたということは，男女の性差にもとづく興味の相違によるものと思われる。

2　保育所における不快経験

次に「保育所で一ばん困つたことやいやだつたことはなんですか」という質問により不快経験としてどんなことが記憶されているかを調べた。第16表がその結果である。この不快経験は性別による著しい差異はみられず，男女とも一番多くを占めているものが，いじめられたりけんかをしたり

第16表　保育所における不快経験

項目	男		女		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
人からの攻撃	10	52.6	21	48.9	31	50.0
対人的不安	3	15.8	8	18.6	11	17.7
所持品の紛失	1	5.3	3	7.0	4	6.5
給食への嫌悪	—	—	3	7.0	3	4.8
昼寝への嫌悪	1	5.3	2	4.6	3	4.8
排尿の失敗	—	—	3	7.0	3	4.8
その他	4	21.0	3	7.0	7	11.3

したこと，すなわち人から攻撃を受けた経験で50%である。男女児とも身体的攻撃に関する印象が不快経験の過半数を占めていることは，保育にとつて注目に値する。次は初めて保育所という未知の生活に入り先生にも友達にも馴れず付添いからは離されてしまうという時の不安な気持が不快経験として印象づけられているもので17.7%。また給食がいやだつた，排尿の失敗をして困つたという経験は，僅かではあるが女児にのみみられる。「その他」の項目の中には製作がわからなつた，服を汚した，泣いて先生に抱かれて恥しかつたなどがある。

3　自覚的教育的経験

次にわれわれは，4年生の児童が，幼児期に経験した保育を現在かえりみて，如何なる点で自覚的にとらえているかを知ろうとした。そこで「今考えてみてためになつたと思うことはどんなことですか」という質問を設け，その結果第17表を得た。表によつてみると，歌，ゆうぎ，折紙，絵などいろいろなことをおぼえたという点，すなわち受動的学習がためになつたと自覚しているものが一番多く全体で48.9%を占めている。ことに女児では抜群の高率である。次は絵本，玩具，紙芝居などの文化財に接したことで全体で26.7%，ただしこれは男児においては半数近くの者が自覚している。これらのことは，先の快的経験を一斉保育に関してもつているものが女児に多く，文化財に関してもつているものが男児に多かつたことと照合すると，単なる快的経験と教育的自覚との間に何等かの有意味な関連がありそうに思われる。なお小学校に入学して早く先生や友達に適応できたと自覚しているものが，僅かではあるが見られる。

第17表　自覚的教育的経験

項目	男		女		計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
受動的学習	7	43.8	15	51.7	22	48.9
文化財との接触	7	43.8	5	17.2	12	26.7
入学時の適応	1	6.2	2	6.9	3	6.6
交友，遊び	—	—	3	10.4	3	6.6
その他	1	6.2	4	13.8	5	11.1

4　保育所経験の話題

次に，保育所での経験が，4年後の現在どのていど，またどんなことが話題になつているかという面から影響度をみようとした。そこで「保育所で一しよだつたお友達と今でも保育所へ行つていたころのことを話すことがありますか。あるとすればどんなことについて話しますか」という設問の答を求めた。

①　話題の有無

まず話題にしているものの率を性別にみると，男児では20名中6名，すなわち30%，女児では36名中22名，すなわち約61%の児童が話題にしている。これにより女児の方が男児より話題の量が多いことがわかる。

②　話題の内容

次にどんなことを話題にしているかを集計してみたが，話題はまつたく種々さまざまであり，かつ話題にする児童数も少ないため，内容を幾つかの類型に分類することは困難である。話題の主なものはまずブランコ，まりなげ，砂あそびなど遊びに関するもので全体で9名，次にゆうぎ，折紙，紙芝居など一斉保育の内容に関するもので4名，次に泣いたことの想い出話で3名となつている。そのほか友達が崖から落ちた，昼寝しないで叱られた，昼寝の毛布を取りつこした，写真をとつてもらつたなどの想い出が話されている。子ども達には快的経験も不快経験も同じ割合で話題になつているようである。

要　　約

以上，一山村の農繁期に開設された季節保育所における保育効果について概観した。2週間という短期間の保育ではあつても，幼児の心的行動にいろいろな面でさまざまな影響を及ぼしていることが見出された。もちろん，親の認知した子どもの行動の変容が果して保育所保育のみによつて規定されたものであるかは疑問であり，その限りにおいて保育効果の厳密な測定は不可能であるが，ここではプラスの面にしろマイナスの面にしろ，その主観的な効果度を客観的に把握することに重点がおかれた。質問紙法としての方法上の限界内において，われわれは上記効果度を明かにすることができたばかりでなく，終始保育所での行動観察によつてある程度そうした結果を検証することもできた。またこの保育効果に関連して，保育経験者としての小学4年児童を対象に過去経験の内省を求め，同じく質問紙法によつて間接的に保育影響を知ることができた。

このような実態的調査結果を通して，われわれは農村における季節保育所の開設と幼児保育の面に貴重な示唆を得ることができ，同時に，解決を要する種々な課題も見出された。そこには，調査法や実施面その他についての難点もいくつか反省点として持たれるのであるが，この調査を基礎として研究法を検討し，残された次の課題，とくに対象幼児の家庭における親のしつけ態度，入所前ならびに入学前における該幼児の心的発達度の実態把握を試み，保育効果に関する発展的な研究を推進したい。

付記　末筆ながら，本学の農繁期保育所開設の初めより施設や保育実施の面で多大の御援助と御協力を賜わつた群馬県利根郡昭和村の村長はじめ，役場職員御一同，南小学校の先生方および幼児の保護者の皆様に対し，この機会に心から感謝申しあげたい。